



秋田県立大学 「現役社長の講話 I」開講

スーパー連携大学院コンソーシアム web ニュース
2016年3月18日

秋田県立大学「現役社長の講話 I」

「現役社長の講話 I」が3月2日(水)～4日(金)、秋田県立大学本荘キャンパスにおいて行われました。スーパー連携大学院プログラム受講生は、北見工業大学1名、富山大学1名、電気通信大学2名、大分大学1名の計5名でした。

1日目は、由利本荘市矢島町にある天寿酒造(株)と由利高原鉄道(株)の施設を見学しました。

天寿酒造(株)は、明治7年創業の酒造りの老舗です。訪問時に酒の仕込みが行われており、酒蔵の中は日本酒の香りが漂っていました。最近では、人口減少や酒を飲む人が少なくなったせいで、以前と比較して酒の消費量が減り、出荷量も減っているとのこと。一方、外国での日本食ブームにより日本酒の消費量が増え、こちらは出荷量も相当増えているとのこと。国内での消費・販売の減少が続く中、今後は外国への出荷増に期待しているとのことでした。

酒蔵では、米麴を見学し、酒造りでは麴が酒の味や甘みなどを決める重要な工程であることから、消費者の声を聞きながら、それに応えて行くことも、杜氏の大切な仕事とのこと。仕込み水も酒造りに重要な要素ですが、この地域は鳥海山から質の良い伏流水が豊富にあり、酒造りに適しているとのことでした。仕込中のタンクの発酵状態を見学させていただき、温度管理が酒の品質に影響を与えるため、適切な温度が維持できるよう気を遣っているとの説明を受けました。酒米については、県外産の山田錦や県内産の美山錦、酒こまちなどを使用し、県内産は地元農家と契約栽培をしています。

見学の最後に、絞りたての原酒を利き酒させていただきました。アルコール度数17度あるとのことでしたが、香りが良く、すっきりした飲み口に感動しました。秋田県総合食品センター醸造試験場と県酒造組合による輸出用純米・吟醸酒用に関発された「AKITA 雪国酵母」により、今後、県産酒輸出の増加が期待されています。

杜氏の一関さんから「杜氏は、酒造りだけではなく、人と人とのコミュニケーションを大切にし、チームワークで仕事ができる環境を作ることも大切な仕事です。酒づくりは人づくりです」と締めさせていただきました。

続いて、由利高原鉄道(株)の車両基地に行き、実際に運行している車両を見学しました。由利高原鉄道(株)は、国鉄矢島線が廃止される際に秋田県や沿線市町村などが出資して設立(1984年)された第三セクターの鉄道会社です。

路線は、羽後本荘駅から矢島駅までの12駅(23km)です。車両基地では、地元のシンボル鳥海山をラッピングしたイベントで活躍する車両や、漫画「ゆりてつ」(松山せいじ作)の主人公をラッピングした車両などを見学しました。



天寿酒造(株) 酒蔵



由利高原鉄道(株) 車両基地

また、車両によってエンジンやブレーキの方式に違いがあることや、乗客の安全のために様々な安全装置が施されていることについて説明していただきました。

見学後、矢島駅から羽後本荘駅まで乗車し、アテンダントから四季折々の車窓からのすてきな景色、イベント列車の楽しそうな様子を写真で説明していただきました。

2日目は、秋田県立大学谷内宏行教授の講義「秋田の歴史・産業史超早わかり」に続き、由利高原鉄道(株)春田啓郎社長、田口木材(株)田口知明社長、(株)ヤマダフーズ山田伸祐社長から講話をいただきました。

また、受講者全員で由利本荘市の郷土工芸である杉の「組子細工」で実際にコースターづくりにも挑戦しました。実際にものづくりをすることによって木のぬくもりと香りを感じることができました。



「秋田の歴史・産業史超早わかり」講義 秋田県立大学 谷内宏行教授

春田啓郎社長からは、「由利高原鉄道の取組」をテーマに、会社の運営方針や社長としての基本的な考え方、これまでの県内外に向けた様々な取組事例などについて説明していただきました。また、今後の施策として、運輸収入を基本としながらも、足りない部分は、グッズや食べ物、旅行商品、貸し切りバス事業など様々な分野の取り組みで補って行くとのことでした。

田口知明社長からは、経営戦略について講話をしていただきました。田口木材(株)の事業内容は、秋田杉製材、内外装材、ツーバイフォー住宅パネル製造販売、新建材販売です。木材業界は戦後復興で急成長を遂げてきましたが、1951年に外国材への関税が撤廃になったことで、安価な外国産の木材が大量に国内に入ってくるようになり、製材工場数は昭和50年代をピークに減り、現在も減り続けているといった木材業界の厳しい現状について説明がありました。また、経営者と社員が目的を共有し、全社一丸となって取り組んでいることや、地域が抱える課題にしっかり向き合い地域が良くなることで企業も良くなるという経営理念が紹介されました。

山田伸祐社長からは、「納豆は発酵食品で粘りとおいがあるため苦手な人もいます。それでは、外国人は納豆が嫌いといわれているが本当かどうか」との問い掛けがありました。外国人の子供や大人には苦手な人が多いが、赤ちゃんは納豆を普通に食べている動画が紹介され、味や食感には問題なく、においや粘りに好き嫌いがあるのではないかとと思われることや、納豆を製造し現在の企業規模になるまでの経緯について紹介がありました。また、農林水産大臣賞を受賞した納豆商品について、受賞に向けて社内でプロジェクトを立ち上げ、過去の受賞商品を分析し製造方法を確立した取組、山田社長が社内の経営改善のために取り組んだ手法についても紹介していただきました。

学生からの質問やレポートからは、地方都市の再生化についての提案が幾つかなされ、地元資源の活用及び広告、産業間の連携や若者の活用などユニークなアイデアが数多く出されました。

現役社長の講話から社長の発するオーラを感じ、多くのことを学んだと思います。

(秋田県立大学 高石 稔)



由利高原鉄道(株) 春田啓郎社長



田口木材(株) 田口知明社長



(株)ヤマダフーズ 山田伸祐社長